



【住 所】岡山市北区伊福町1丁目17番18号

【病院長】糸島 達也 先生

【病床数】553床(小児 27床、緩和ケア 25床を含む)

【スタッフ】消化器内科医師(常勤)17名(うち、認定指導医 3名)、内視鏡看護師 7名(うち、内視鏡技師 1名)、臨床検査技師 2名、看護助手 3名、受付 2名

【内視鏡検査・治療総数】(平成20年)内視鏡検査総数 12,002件(上部7,709件、下部3,688件、ERCP 396件、気管支 209件)、EUS 140件、EIS 98件、EVL 32件、上部ESD 89件、下部ESD 14件、経鼻内視鏡103件、ダブルバルーン小腸11件、PEG造設104件

【保有内視鏡関連機器総数】内視鏡光源 6台(うち、NBI 2台)、上部用14本、経鼻1本、下部用11本、十二指腸用3本、ダブルバルーン小腸内視鏡1本、EUS 1本、気管支用 5本、カプセル内視鏡データレコーダ 2台、アルゴンプラズマ凝固装置 1台、高周波装置 4台

## 地域医療を支える地域の中核病院として 高度医療の実践と優れた人材育成に努める

### 充実した人員と経験豊富なスタッフで 良質な内視鏡検査を地域に提供

岡山済生会総合病院は553床を有する総合病院で、岡山県の中核病院の一つです。保健・医療・福祉の充実と発展を通じて地域医療に貢献しており、また巡回診療船による離島検診等を始めとするへき地での診療や検診を積極的に行っており、現在では岡山県へき地医療支援機構も担当しています。同院はまた、救急医療や緩和ケアを含むがん診療にも力を注いでおり、平成14年12月に岡山県で初めて地域がん診療連携拠点病院に指定されています。「救急医療」、「がん診療」、「センター医療」および「へき地医療」の4点を運営方針の基本とし、地域の急性期病院として地域に高度先進医療を提供しています。

内視鏡センターはこの4つの基本方針のうち、「センター医療」、「救急医療」、「がん診療」に大きな役割を果たしています。そのため看護師や事務員の数を十分に配置し、患者様一人ひとりに対して時間を割き、安楽な処置や検査を提供できる体制を整えています。救急医療に関しては、医師、コメディカルともに交代で夜間と休日の担当を割り当て、24時間365日対応しています。そのため、平成20年の夜間、休日の緊急内視鏡検査数は216件にも上りました。内視鏡センター長の吉岡正雄先生は、「当センターでは「岡山消化管病診療連携懇話会」を開催し、地域の病診連携を進め



内視鏡センター長  
吉岡 正雄 先生

る中心的な役割を担っています。そのため、近隣施設からの紹介患者も年々増加しており、現在では予約の別枠を設けて積極的に対応しています。昨年は紹介の患者様に対して上部内視鏡検査で532例、下部で221例を実施しています」とご説明されました。最近では患者様から経鼻内視鏡に関する問い合わせも増えているようですが、吉岡先生は「当院では内視鏡検査において精密診断を最も重視しておりますので、経鼻内視鏡は適切な機会と判断した場合に限って施行しています」とお話になり、通常は拡大内視鏡やNBI、EUSなどの高性能機器を用いた検査を基本としているそうです。また、「地域住民に対しては市民公開講座を開催し、内視鏡検査や治療に関する情報を積極的に提供するようにしています。そうすることで住民の検査受診の動機を形成し、病気の早期発見により患者様の利益を高めたいと考えています」とお話をいただきました。

### 内科医の基本である内視鏡技術を 広く後進に伝えていくことが使命

内視鏡センターでは、胃や直腸、食道の早期癌に対する内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)の治療を積極的に進めており、平成20年には103件を施行しています。ESDのような高度な内視鏡手技の進歩や変化に迅速に対応するため、同院では国立がんセンターへ医師を派遣して最新技術の習得に努めているそうです。同センターでは週に一度行われるカンファレンスでの検討内容の結果を看護師やスタッフがいつでも閲覧できるようにし、全員が内視鏡検査処置への理解を深められるよう工夫されているそうです。

また、地元の岡山大学の学生を実習に受け入れ、実践的な知識を提供することで地域の後進育成にも貢献しています。さらに、全国の済生会病院と共同で研究や学会発表を行うなど、医師やスタッフが積極的に知識や技術の向上を図れる体制を整えています。

同センターでは内視鏡専門医の育成にも力を入れており、研修医に対しては初期研修2年目に1カ月間の「消化器内視鏡コース」を設け、希望すれば1カ月間集中して消化器内視鏡研修に専念できる環境を提供しています。同院副院長の塩出純二先生は、「内視鏡技術



副院長  
塩出 純二 先生

は、内科医にとっては決して特別な技術ではなく、スタンダードに備えておくべき技術として捕らえて指導に当たっています。そのため、研修医に対しても“見学型”ではなく“体験型”の研修を心がけ、モデルを用いたトレーニングからERCP、緊急時の対応に至るまで、総合的な経験の場を提供して幅広い知識と技術を有する人材の育成に努めています」と、同院の教育方針についてご説明いただきました。

## ● 患者様と医師のニーズを常に意識し 看護師として最大限のサポートを提供

内視鏡検査や治療において、看護師の立場から意識していること、注意している点なども伺いました。看護師の河原悦子さんは、「患者様には安楽に検査や処置を受けていただくこと、また医師には手技に集中していただくこと、この2つを常に意識し、業務にあたっています。そのため、前日のうちに翌日の予定を確認し、どの医師がどのような処置をするのかを把握した上で診療に望めるよう努めています」

とお話になりました。また、同じく看護師の五藤輝之さんは、「手技によって異なる処置具の選択や取り扱いが求められるため、状況に応じてスムーズな対応ができるよう、万全の準備を整えるようにしています。そのためには、日頃から医師との円滑なコミュニケーションを心がけ、医師のニーズを把握するよう努めています」とご説明になりました。そのため、新しい機器や処置具が導入された際には、メーカーが提供する勉強会を活用して知識の習得に努めているそうです。同センターでは毎朝、医師も含めたスタッフが参加するミーティングを行っており、その際に当日の業務の重要事項を全員で共有していますが、この機会に勉強会で取得した知識を共有化するなど、コミュニケーションの場としても活用しているそうです。

同センターでは感染対策、安全管理に対するスタッフの意識が高く、内視鏡処置具の洗浄ガイドラインが制定される以前から、独自の洗浄過程を作成して実施してきた歴史があります。そのため、患者様やスタッフの安全を守るためにも、ディスポーザブル製品はその一環として使用が定着しているそうです。また、救急症例が多いことから、単回使用の製品は性能が安定しており、常に期待通りの性能を発揮できることから、医師やスタッフはストレス無く処置が行えるとのことでした。



左：看護師 五藤 輝之さん  
右：看護師 河原 悦子さん



内視鏡センターの皆さん